



## 付5話 大学院への進学

今回の話はコンピュータから少し離れるが許されたい。設計事務所での2年間はそれほど厳しいものでもなく、むしろ楽しく過ごせた。この時期、大学から構造事務所に入ると、数年は研修を行う。研修とは名ばかりで、実は見習いである。

当時、構造技術者の見習いは構造図の変更から始まる。手書きの構造図のコピーに朱書きされた変更部を、原図の構造図に書き込む。次々と舞い込む変更に、ひたすら原図に手を加え、修正する。後年、自分の教え子から聞いた話であるが、この見習いを数ヶ月行くと、自分の仕事に疑問を持つそうで、仕事を出していた先輩にもう少しましな仕事をさせて欲しいと頼む。渋い顔をしていたが、構造図の一部を書けと仕事が割り振られた。説明や支援があると思っていたが何もなく、途方に暮れ、最後にはノイローゼ、ギブアップである。先輩にはいつもの図面修正で何をやってきたのか、単に修正するだけでなく、図面の詳細や細かな設計などを観察してきたかなどと叱責された。漸く目が覚め、元の見習いをやりながら何かと図面や先輩のやることに気を配る。オンザジョブ・トレーニングをこなすことで、一人前の構造技術者になったそうである。

私は幸か不幸か、コンピュータのお守りという役目が最初から与えられたため、このような研修は全くなく、先輩達との付き合いも結構有利な立場で仕事ができている。ただ、本を読む毎に、構造技術者としてこれから暮らしていけるか、これで良いのかという疑問と不安が大きくなる。それと同時に、何か広い世界が待っているような気がして、時々憂うつになる。2年目に入るところから大学院に進学することを考え始め、元の大学のM先生に相談したところ、知り合いがいるから、大阪大学と名古屋大学を受験しろと言われた。物事を単純に考え、瞬時に相手の意思を見抜き、適格に指摘できる能力がうらやましい。

副所長には一応相談らしきことをしたが、いい顔はしなかった。後から考えると私もひどい仕打ち、一体誰がHITAC10のお守りをするのか。それでも、修士を出たら戻って来いと言われた。大学時代のノートを引っ張り出し、3ヶ月近く試験勉強をしたが、多くのことを忘れていたことに気付いた。両大学とも筆記試験と面接があったように記憶している。筆記試験の内容は全く覚えておらず、多分あまり良くなかったと思う。阪大での面接は専門の知識を問う問題でほとんど答えられず、自分の知識が大きく偏っていることを思い知った。名大の面接は将来のことや世

間話程度であり、口頭試験とは思えない内容であったが、自分にとってはありがたい。結果は、阪大は不合格となり、名大は合格となった。多分滑り込みだと思う。

名大進学を公表した後の半年は、構造技術者としての基礎を手短かに教え込まれた。図面の修正や荷重拾い、構造図の書き方や簡単な設計まで一通り学んだ。何せ超特急、身についたかどうかは自身良く分からない。退職時、所長から学費は全て出すから戻って来いと言われた。このようなことがあったら断れと、M先生から言われており、お断りした。新たな進路がどのように開けるかわからない。今から決める必要はないというのが理由である。頭の良さに恐れいる。

3月末に名大から呼び出しの電話があった。ゼミがあるから出て来いという。行くと既に、自分の研究室が決まっており、机と本箱があった。ゼミが始まると、教員とゼミ生全員の自己紹介が行われた。ここで初めて、大変なゼミに所属することになったと実感する。名大建築学科第一講座は通称松岡研と呼ばれ、構造力学を中心に学び、研究するところである。教授と講師が各一名と助手が一人、博士課程の院生が6名、修士が4名と豪華な研究体制となっていた。特に後で分かったことだが、博士課程の院生6人は個性豊かで各々独自の研究課題を持っていた。

ゼミが始まると、次々と研究課題の説明と進捗状況、将来への展望、学位論文へのスケジュールが話された、と思う。実は内容を全く覚えていない。理解できない情報は記憶できない。ただ、質疑応答が厳しかったことを覚えている。何故、他人の研究にあれほど熱心に、しかも辛らつに質問を繰り返すのか、その意味が理解できなかった。議論の激しさと、広い世界へ第一歩を踏み出した希望と、それにも増してやっていけるだろうかという大きな不安を記憶している。

修士の講義が始まり、何回かゼミが行われると、博士6人の研究課題が多少分かってきた。新規の修士である3人の1年生に対し、一緒にやらないかという勧誘が始まった。3人とも名大の卒業生ではない。ゼミ性のうち6人が他大学からの進学者であり、グローバルなゼミといえる。自分の劣等感が緩和されるわけではないが、同期3人が名大の卒業生ではないことに多少癒される。研究課題を検討した結果、博士課程3年のK氏と共同研究を行うことにした。他の研究、例えば地盤振動や海洋構造物の振動など、自身にとってあまりにも難しく思えた。共同研究といっても名ばかりで、研究の一部を受け持つことで、プログラムを整理し、計算する仕事である。後に、K氏は日本を代表するような研究者となっていく。これについては次回以降お話ししよう。